

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	W. P. Alston: Philosophy of Language, 1964, by Prentice-Hall, Inc. : ウイリアム・P・アオルストンの意味理論について
Author(s)	田中, 泰賢
Citation	ニダバ , 2 : 65 - 69
Issue Date	1973-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044692
Right	
Relation	



W.P. Alston : Philosophy of Language,
1964, by Prentice-Hall, Inc.

— ウィリアム・P・アールストンの意味理論について —

田 中 泰 賢

言葉の意味の本質を探究する為に意味理論を referential (指示的)、ideational (観念的)、behavioral (行動的) に分類している William P. Alston の論考を展開して行きたい。

「みけ」という名で呼ばれる猫がいると仮定しよう。この場合曖昧性は全く無い。何故なら「みけ」という語が意味を持つのは、この語がその猫の名前という事実があるから。意味ある表現を問題にする時、それがある意味を持っているのは、その表現が指示すべき何ものかが存在しているのだと理解される。しかし意味をその指示という現象のどこに位置づけるかで、指示理論は2つに分かれる。1つはある表現の意味はその表現が指示する事物であるが、他方はその表現とそれが指示する指示物との間の関係と同じであると考え。「夏目漱石」と「『心』の著者」の場合である。漱石は「心」の著者だから、この2つの表現は同一の人物を指示している。しかしこの両者は同じ意味を持っていない(漱石は英文学者でもあった)。ある表現がある対象を指示するという事実によって、その表現に意味が与えられるとは限らない。又逆に同じ意味であるが違った指示物を持つ場合もある。例えば花子が「私」と発話したら、その「私」は花子を指示する。発話者が満子なら、指示される対象も満子に変わる。しかし「私」の意味は変わらない。この「私」は話し手という1つの意味だけを持っているのである。どんな形の指示理論であっても、意味ある言語表現は全て何か指示物を持つということが真で無い限り、意味についての一般理論としては妥当でない。1つには言語には本質的に語と語を結合させる働きを持つ接続詞等が存在する。「～だが」、「～の時」の語が何かを指示するだろうか。又「象」等の名詞、「強い」等の形容詞、「書く」等の動詞がその指示物として何を選択すべきかが理解されていない。「象」という語は、ある重要な仕方では象のクラスと結合しているのは確かであるが、果して「象」は象のクラスを指示するだろうか。象のクラス全体を問題にする時、「象」という語はそのクラス全体を表わす語として適当ではない。例えば象のクラスは大変小さいと言いたい時、「象は大変小さい」という文を述べたのでは言いたい意味は達せられない。故に「象」という語は単

に象のクラスを指示するという作用をしているのではない。これは次の様に定義出来る。

Wはxを指示する = df. Wは、ある文Sの中でそのSがxを問題にしている文であることを明らかにする為に使われることが出来る。

「語がある意味を持っている」と「その語が何かを指示する」とは同じではないのである。「象」という語は象のクラスを指示するわけではないが、象のクラスを外延する。又「強い」は人間のある性格そのものを指示するわけではないがそういう性格を内包しているとも言える。しかし「～の中に」の前置詞が何か事物を外延したり、内包したりするだろうか。意味ある表現の全てが必ずしも表象する対象を持っているわけではないのである。指示理論は世界を構成している個々の要素と意味ある言語単位1つ1つとの間の孤立した1個の対応関係として表現される。ところが言語と世界との関係はそれほど単純ではないのである。意味の指示理論が、言語は事物について語るために用いられる、というのに対して観念論と行動理論はどちらも、語が意味を持つのは人間が言語を使う際に行なう人間の行動の結果であるということに基づいている。ロックはある言語表現が意志交換の時はある観念のmark(符号)として普通用いられると述べている。この考えの条件は、言語表現の個々の意味にとってどうしてもある観念の存在が必要であり、又その観念はその観念の存在を示すmark(符号)という形で使用されるものとなるものである。ロックはこの条件を満足させようとして「観念」は「感覚」を意味すると考えた。しかし例えば「馬」という語を使ったら、馬の像が現われるとしても、常に同じとは限らない。ある時はサラブレッドの像であり、ある時は日本馬であるかも知れない。レオナルド＝ブルームフィールドは行動主義心理学の複雑性を無視して行動理論を用いている。一般に状況には非弁別の特徴と弁別の特徴があり、この両者を区別して考えねばならない。後者はある言語形を話し手に発話させるようにさせる全ての状況に共通したものをいう。この為の条件も観念論と同じである。しかし「背広」という単語をとってみても発話がなされた状況やそれらの発話が引き起こす反応の間に共通で特有な観点はあり得ない。

○僕の背広にアイロンをかける

○この背広は新しい

○彼は古い背広を持っている

モリスはある人がある反応Rを起こす性向をもつということは、単にそのひとがRを行う条件Cがそろっているということに等しいという。「すぐ来なさい」という命令が発せられることで聞き手の性質についてのある仮説が成される、つまり聞き手が普通話し手に従う傾向をもっているなら、来るであろうという仮説が成されるであろう。しかし「道元は『正法眼蔵』を書いた」という歴史的発言から意味論的性向がどれほど生まれるのか。又Aが「広島の外に安い土地がありますよ」とBに言っ

てもBがAを信用していなかったら性向をひき起さない。たとえAを信用していてもBに障害となる原因があれば性向は示されないのである。

意味はこのような理論がとらえたような種類の要因に直接従って変化するような関数には決してならない。行動理論主義者達は意味というものを聞き手の側の反応だけから構成しようとしている。しかし聞き手は言われたことに対して反応する場合も、そうで無い場合もあるが、話し手の方では必ず何かをしているはずである。ある表現の意味がこれこれだという場合に我々のしようとしていることは別の表現を示す。だから2つの表現が同じように使われるとはどういうことかが問題となる。話し手がその言語をどのように使うか、その用法の関数として示すことが出来るかを考えてみなければならない。この為には文から出発して、語の意味の概念を明らかにする事が重要である。そこで文を使用する時に入ってくる色々な種類の行動を分類する事が出来る、ジョン＝オースティンに従って

(1) locutionary, (2) perlocutionary, (3) illocutionary の3つに区分される。(2)と(3)の行動との間の区別こそ重要である。

illocutionary

報告する

伝える

perlocutionary

xに……を知らしめる

説き伏せる

perlocutionary は本質的にその行為の中になんらかの結果を含んでいるが、illocutionary はそうではない。illocutionaryはその基礎としてlocutionaryが必要である。

illocutionaryはperlocutionaryを達成する手段となり得るが、その逆は成り立たない。「what time is it ?」と「今何時ですか」という2つの文が同一のillocutionary actを行なう為に等しく使われるという事実があれば、その2つの文に同一の意味を賦与するには十分であるということが暗示されている。「あれが私の父方の祖母です」と「あれが私の父の母です」はどちらもある人物を同じように設定するために使われた文である。そこで文の意味を一定として

S_1 は S_2 を意味する = df. S_1 と S_2 は同一の illocutionary 達成能力を持つ

2つの語が同じ意味を持つと言えるのはその語を含む各々の文の持つ illocutionary 達成能力に対して各々の語の果たす役割が同じである時であり、又その果たす役割が同じであるかどうかを試すには、その語を他の語と置換してみることによって、置換された文と前の文との illocutionary 達成能力に変化があるかどうかを確かめればよい。例えば「延期する」と「ものごとをさきに延ばす」との間の同義性は、この2つの表現が上の意味で同じ役割を果たしていることにあり、又それは逆に「あなたはいつも延期する」は「あなたはいつもものごとをさきに延ばす」と同じ不満を述べるために普通使われる、という事実によって保証されている。だから語の意味の規定は次の様になる。

W_1 は W_2 を意味する = df. W_1 と W_2 とは、広範囲の文の中で各々の文の持つ illocutionary

達成能力を変えずに相互に置換することが出来る。

「貧しい」という言葉はある場合に「やせている」を意味するし、「貧乏な」を意味する。言い換えれば、我々には数多くの意味のうちどの意味が問題になっているかが文脈からはっきりしている時には、わざわざ「1つの意味」と言わないで、ただ「意味」と言ってよいとも言える。ある表現の1つの意味を規定するには次の様に定式化すればよい。

E_1 の1つの意味は E_2 である = df. E_1 は E_2 が普通持っている様な使用方法を持つことがある。

もし E_2 の方が問題の使用方法を例外的に持っているとしたら、この展示関係は問題の使用方法を明確に規定することが出来なくなってしまう。文に拡げてみると次の関係が得られる。

S_1 の意味の1つは S_2 である = df. S_2 は普通 illocutionary act を行なう為に使われるが、 S_1 も同じ行為を行なう為に使われることがある。

さらに語に拡げてみると、

W_1 の意味の1つは W_2 である = df. W_2 を構成要素とする大部分の文では、その W_2 を W_1 で置換してもその文のもっている illocutionary act 達成能力を変えないですむ。

2つの語がなんらかの方法で相互置換可能性を持っているならば、両方は同一の用法を持つ。しかしそれだけで2つの語が共通に持っている用法そのものを性格づけることにはならない。他方2つの文が同一の illocutionary 達成能力を持っているならば、同一の用法を持っていると言えるし、又問題の illocutionary act の規定という点でも各文が持っている用法の規定は完了している。2つの表現が、どの様な条件があれば同一の用法を持つかという点がわかれば、我々がある表現がこれこれのことを意味すると言う時に我々が一体何を言っていることになるのかをはっきりさせることが出来るのである。だが意味の概念が現われるのはこのような文脈に限定されないのである。言語行動の妥当な単位としての illocutionary act に分析を集中することが、意味を分析する上の正しい道であるとするならば、illocutionary act という概念は意味論において最も基本的な概念ということになる。S が H に対してある窓を閉めるよう依頼した、ということが出来る為には S はある適当な文 S を発話し、かつ次の規則が自分の発話した文 S を支配していることを認めていなければならない。即ち文 S は次の条件が満足されていない限りはその種の文脈において発話されたことにならない。

1. その文脈中に含まれることがらによって、はっきりとそれと指定された、ある特定の窓が存在す

る。

2. その窓はまだ閉っていない。
3. Hがその窓を閉めることは可能である。
4. SはHにその窓を閉めさせることになんらかの関心を抱いている。

illocutional act が成り立つ為に必要なことは、話し手のしょうとしていることが状況上の条件が成り立つことを必要とするような規則によって、支配されているものであることを話し手が認識していることなのである。言語のもっている rule-governed character が意味論にとって重要となるのである。